旧約各所

説教「新しい契約」

エレミヤ書 31 章 31〜34 節（口語訳聖書）

1973.11.30

待降節礼拝

日本バプテスト同盟 関東学院教会

預言者エレミヤはアナトテの祭司ヒルキヤの息子であり、ヨシヤ王の 13 年からゼデキヤ王の 11 年まで、すなわちイスラエル（ユダ）の滅亡とバビロニア捕囚（ほしゅう）に至るまで、若き日より 40 年の間、ユダの歴史と運命を共にした預言者でありました。母の胎に宿る以前から選ばれ、万国の預言者として立てられました。神の言葉を語るために立てられたのです。

今朝（こんちょう）は私たちの救い主イエス・キリストの御降誕を待望するアドベントの第 1 週に当たりますので、エレミヤの預言の中からこれに関係する最も大切な箇所を取り上げ、彼の語る神の言葉に耳を傾けたいと思います。

31 節からの今朝の箇所は、「主は言われる」との力強い言葉で始まっています。すなわち、「わたしがイスラエルの家とユダの家とに新しい契約を立てる日が来る」と。今、イスラエルは強敵に滅ぼされようとしています。イスラエルの神が支配しているはずのその王国が滅びかけているのです。しかしながら、「もう何もかもおしまいだ」と誰しも絶望の声を上げてしまうそのような滅亡のただ中にあって、滅亡のその後に来たるべき新しい時代が近づいていることを、エレミヤは告げたのであります。国が滅亡するその中では、人は嘆きの歌を歌って悲しみに沈み、沈黙してしまうのが普通であります。エレミヤも、国が滅びることの悲しみを人一倍、噛（か）み締（し）めたことでしょう。けれども、エレミヤを捉えていたのはそういう感傷の歌を歌うことではなかった。人間の思いをはるかに超えた、神からの言葉を語るように召されていたのです。滅亡を前にして、しかし、滅亡の後に来る約束の言葉を語る。エレミヤは、人間の絶望を超えた、人の思いをはるかに上回る神の御意思を知らされたのであります。

では、新しい契約の日が来るとは、どんな内容を持っているのでしょうか。それを、次に見てみましょう。

それは、「わたしがお前たちの先祖を、その手をとってエジプトから導き出したときに立てた契約とは違う」(32) といいます。つまり、シナイ山でモーセを通して与えられたその律法を媒介とする

契約をもう一度やり直すというようなものではない、というのです。

契約というのは二者間の相互的な約束事であり、誓約したことに忠実でなければ維持できません。神はイスラエルを己（おのれ）の民とする。それに対し、イスラエルの民はその神を彼らの神とし、それに従順に従う、と神に誓いました。出エジプト記の 24 章 3 節を見ると、「モーセはきて、主のすべての言葉と、すべてのおきてとを民に告げた」とあります。これに対し、「民はみな同音（どうおん）に答えて言った、『わたしたちは主の仰（おお）せられた言葉を皆、行います』」と記されています。それだけでなく、彼らは 7 節でもう一度、言っています。「わたしたちは主が仰せられたことを皆、従順に行います」と。

新しい契約というのは、そういうようにして神と民との間に立てられた契約と同じようなものをもう一度立て直すというのではない、ということです。仮にそのようにして立てたとしても、結果はやはり同じであったでしょう。丁度、私たちがよくやるように、「今度こそ、必ずやります」と言っては、それを破ってしまう。そしてまた「今度こそ」と、何度も「今度こそ」と思ったり誓ったりするのですが、同じ繰り返しで終わるのであります。

イスラエルの民は神との間に誓ったその契約を破った、と言われています（32)。神様との契約を破ったということは大変なことです。契約の当事者のどちらが悪いのか、言うまでもありません。破ったのはイスラエルであります。神の真実は変わりません。

ここに、「わたしは彼らの夫であった」（同）という表現があります。この契約は夫婦の関係に擬（なぞら）えていると言えましょう。教会も同様で、キリストが花婿、教会の信徒は花嫁という関係で表わされます。教会で結婚式を行うとき、そこでの中心的な事柄は、結婚する二人が神と会衆との前で互いに節操を守ることを誓約することであります。司式する牧師はその誓約の上に神の祝福を祈り、二人が夫妻であることを宣言します。そして、「神が合わせられたものを、人は離してはならない。アーメン」とやるわけです。しかし、そのようにして厳かに結婚式をしても、時には駄目になり、離婚することが起こるのであります。それは司式者にとっても仲人（なこうど）さんにとっても悲しむべきことですが、事実であります。

神様はどうして、誓ったことを破ってしまうような民と契約を結ばれるのだろうか。神はなぜ、律法を破らせないようになさらないのか。そう思われることでしょう。神はどうして人間を、律法によって身動きできないように、ただ従う以外ないように縛っておかれないのか。なぜ、破るようなことを見逃しておられるのだろうか。そんな問いが出てきます。しかしそれは、神が契約において、イスラエルの民が自（みずか）ら進んで誓約したことを忠実に守るよう求められたからにほかなりません。神と人間との関係は人格的なそれであると言いますが、それは機械的にボタンを押せば何か出てくる式の関係ではありません。神は人をロボット扱いしないのです。神の命じたことに対し、人がそれに自分の意志で、自由な決断をもって従ってゆくことを欲しておられるからです。そういう扱いを人格的扱いと言います。

そして、神と民とのこのような人格的契約関係というのは、別な言い方をすれば、互いに自己の責任を負うということでもあります。責任をもって行動するということです。民にあっては、律法を媒介として神に従うという責任を果たすことが求められることになります。けれども、律法を必ず守り行うというその誓約を、イスラエルの民は守りませんでした。守るべきことを知っていて、守らなかったのです。律法に違反してはならないということを知っていて、律法を破り、罪を犯しました。その結果、契約は破られてしまったのでした。その責任は、破った人間のほうにあります。誓約に違反した責任を、人間はとらなければなりません。

その責任とは何かというと、イスラエルの国は本来、神の律法を守り行うために与えられたのですから、それを守らなければ、国を与えた理由がなくなります。結果、イスラエルは諸国によって滅ぼされて滅亡し、エルサレムの住民の主要な人々は皆、敵国バビロニアの捕虜となったのでした。私はつくづく思うのですが、もし滅ぼされたイスラエルの民がこのエルサレムの滅亡を神に対する自己の不忠実の結果と認め、その悲劇的崩壊の出来事を自らの責任において受け止めることをしていなかったら、すなわちそうしえていなかったら、イスラエルは永遠に地上から消滅し、歴史からその姿を消していたかもしれない、とそう思わされています。つまりは、イスラエルの歴史は、その神が人格的な神であることを示しているということです。そして、契約という相互の人格関係を、神と民とが互いに貫くこと。そこに宗教の生きる道があることを、イスラエルの歴史は証（あか）ししているということです。

イスラエルは、バビロニアにおける捕囚中、亡国という運命の悲しみに耐えました。罪の結果を甘んじて受け、捕囚の生活に数十年も耐えたのです。そして待ち続けたのが、今朝のエレミヤの預言でした。神は依然として、彼らの人格的な神であり続けてくださいました。

とはいえ、先の契約関係は、民の契約不履行によって失効してしまいました。イスラエルはもはや、破れた契約を自分のほうから立て直すことはできません。にもかかわらず、この破れた両者の関係がもう一度、新しくされると預言されているのです。破られた契約がどのようにしていま一度、新たに立てられるのでしょうか。

そのためには、人間の側からではなく、神の側から手が差し伸べられなければなりません。神が近くにあって、神のほうから何らかの手を打ち、新しい関係を創り出す以外にありません。それは例えば、何事もなかったかのように、夫婦仲が元の鞘（さや）に収まるというようなものではありえません。実際、イスラエルにおいては、神に対する契約の違反には実に厳しいものがありました。もし再度の契約があるとすれば、それは神の愛と憐（あわ）れみとによります。イザヤ書 54 章 5〜8 節を読んでみましょう。

ですから、神は言われるのです。「これらの日の後にわたしがイスラエルの家に立てる契約はこれである」(33) と。すなわち、神が人々の心の内に律法を入れ、その心にそれを書き込む（同)、と。そして、言われます。「わたしは彼らの神となり、彼らはわたしの民となる」(同)。ここで「心に律法を書き記す」というのは、いわば人の体を外からがんじがらめに縛り上げ、縄を付けて無理やり引っ張ってゆくような、そのような意味合いで「律法でもって強制的に」というのとは違います。心に律法を記すことで、心それ自体が律法を心得、律法の命ずるところを自ら行うようになる、そのような心を与える。そして、人は神との契約に入り、人格の関係をもって生きていく者とされる、ということです。

この新しい契約が古い契約と著しく異なる点は、先の律法による契約が民という運命の共同体と神との間のそれであったのに対し、新しい契約においては、神と個々人との間の契約関係としてそれが設定されていることです。エレミヤ書 31 章 34 節の言葉は、大小・上下・貧富・その他、身分上・社会上の区別を超えて、すべての人が神を知るようになる、と語っています。それはすなわち、イスラエルの民全体としてではなく、一人ひとりが個人として神の前に立つようになることを意味しています。

日本人は孤独になれない、それに耐えられない、と言われます。だから徒党を組むのだ、と言います。一人で事の責任をとることを避けようとする。群衆の中に隠れて悪事をするような人がいる。人がやっているようなことをしていれば、それで安心という考えが浸透しているようです。言ってみれば、古い契約がそうでありました。

しかし、新しい契約の時が来ると、一人ひとりが神の前に責任をもって立つようになるというのです。そして、神に背いている私の罪を神御自身が赦し、それをもはや咎めることをしないと言われます。背きの心を癒やして清くし、神の前に従順な心に変えて、それを新しくなさる時がそれであります。

滅亡の憂き目を目の前にしてうろたえている民に向かって、エレミヤはこの神との新しい契約の日が来たりつつあることを告げたのであります。神の言葉は真実です。エレミヤは神の真実を徹底して学ばされました。エレミヤは真実をもって神の真実の言葉を受け、かつ告げているのであります。私はエレミヤの真実を、疑う余地のないものと信じています。

そして、もう一つ真実であると思えるのは、エレミヤが自分の国と滅びの運命を共にしようとしていたことです。国が滅びてゆくのを神の裁きとして受け止めつつ、ここに告げているように、来たるべき新たな契約の日を指し示した。その事実のうちに、エレミヤの真実を見ます。自己の崩壊を内に嚙み締めつつ、崩壊の後に来る新しい日を信じて告げる。ここに、本当の真実を窺い知るのです。

自己が滅びることによって、滅びと死から命の真理への道を開き示す。それは実に、あの十字架に示された道ではないでしょうか。「見よ、新しい契約を立てる。その日が必ず来る」と神は言われま

す。それは、歴史の中でそれが必ず実現するということを示しています。イエス・キリストの誕生を迎えようとしている私たちにとって、この言葉はキリストにおいて真実となったのであります。

新しい契約を立てるために神から遣わされたお方、イエス様を心から迎えたいものです。待ち望みたいものです。「主よ、来たり給(たま)え」と祈りたいものです。そして、心の備えをいたしましょう。